

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

<噴火警戒レベル3（入山規制）が継続>

口永良部島では、本日（11日）15時05分に噴火が発生し、18時00分現在も継続しています。噴煙は火口縁上2,000mで雲に入り、東方向に流れました。京都大学防災研究所のレーダー観測で、噴煙が海拔3,000mまで上昇したことが観測されました。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況（図1～4）

口永良部島では、本日（11日）15時05分に噴火が発生し、18時00分現在も継続しています。噴煙は火口縁上2,000mで雲に入り、東方向に流れました。京都大学防災研究所のレーダー観測で、噴煙が海拔3,000mまで上昇したことが観測されました。この噴火により、屋久島島内で降灰が確認されました。

監視カメラにより、噴火に伴う大きな噴石が火口から300mまで飛散するのを観測しました。火砕流は観測されませんでした。その後も噴火は継続しており、噴煙高度は火口縁上400m（18時00分現在）で、南西方向に流れています。

火山性微動は、噴火が発生する前から次第に大きくなり、噴火発生に伴いさらに大きくなりました。その後は、次第に小さくなりました。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり300～1,600トンと多い状態が継続しています。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平29情使、第798号）。



図1 口永良部島の噴火の状況

本日（11日）15時05分に噴火が発生し、噴煙は火口縁上2,000mで雲に入り、東方向に流れました。京都大学防災研究所のレーダー観測で、噴煙が海拔3,000mまで上昇したことが観測されました。

上段：本村西監視カメラ

下段：本村西監視カメラ（ズーム）

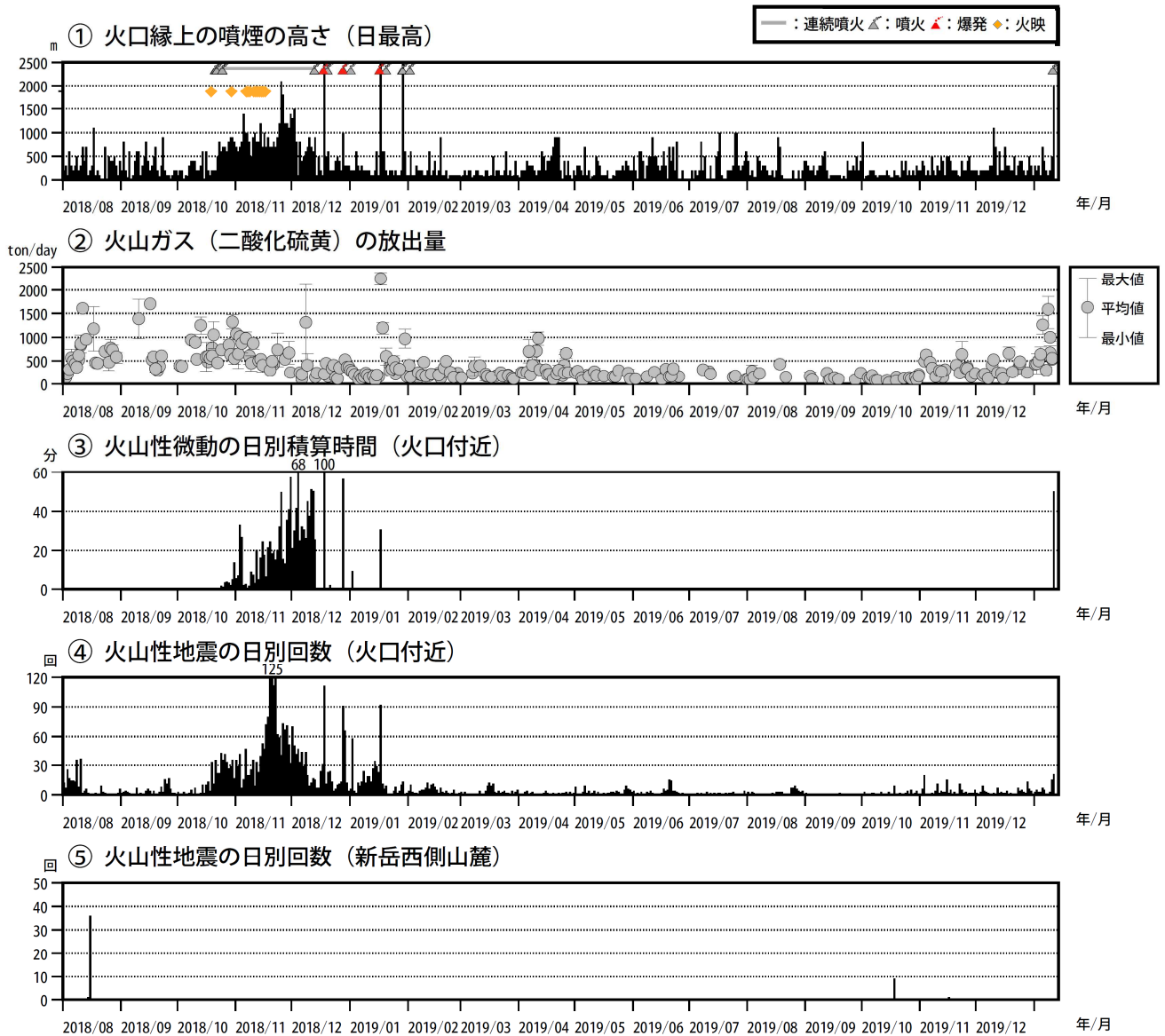


図2 口永良部島 最近の火山活動経過図 (2018年8月～2020年1月11日17時00分)
・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス (二酸化硫黄) の放出量は、2019年12月は1日あたり100～700トンでしたが、2020年1月に入り1日あたり300～1,600トンと増加しました。

②のグラフは観測を複数回実施できた場合に最大値・平均値・最小値を表記しています。

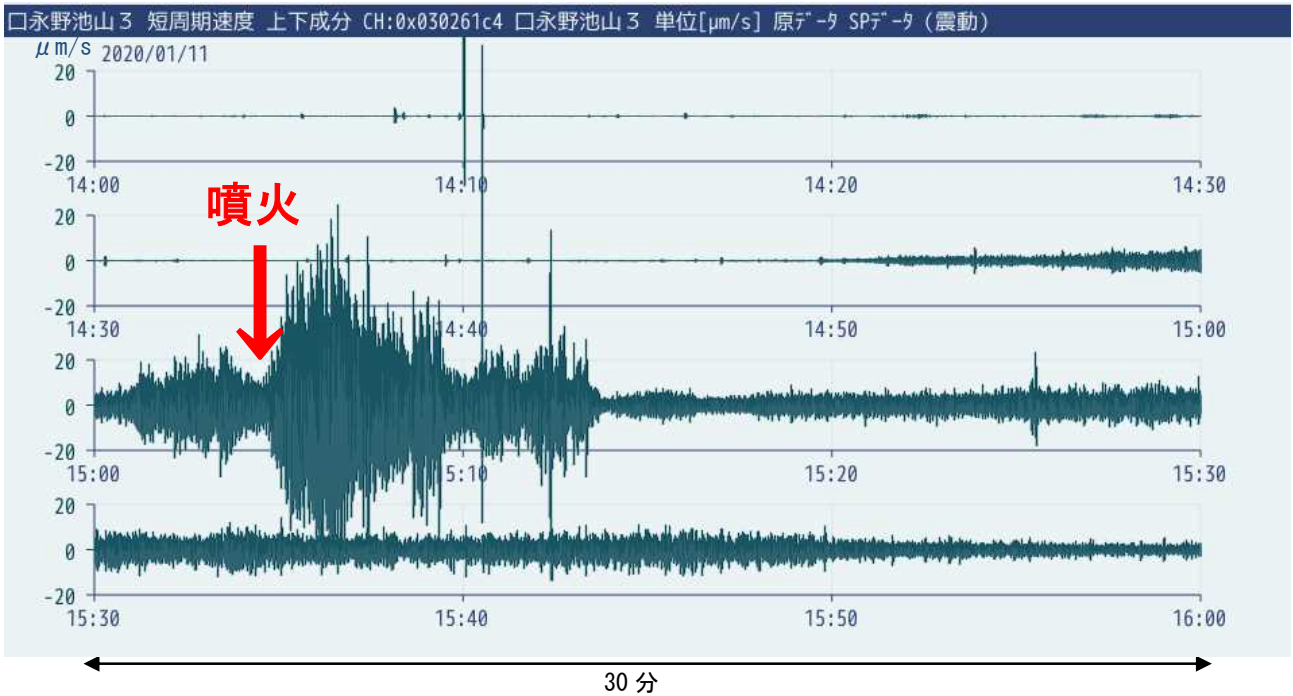


図3 口永良部島 地震波形（野池山3観測点：上下動 1月11日14時00分～16時00分）
火山性微動は、噴火が発生する前から次第に大きくなり、噴火発生に伴いさらに大きくなりました。その後は、次第に小さくなりました。

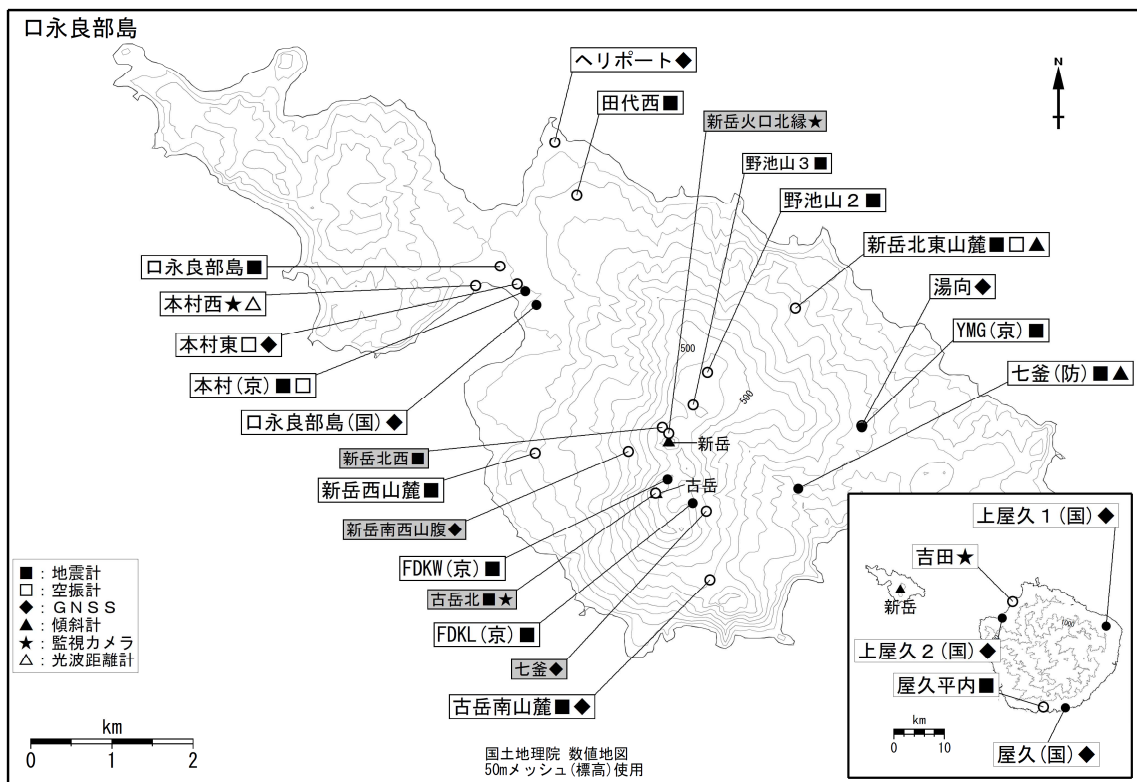


図4 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。